

巻頭によせて

管理者 山本敏行

昭和55年に当病院が創立50周年を迎え、現在地に新築移転したのを機に再発足した本誌も、年ごとに巻を重ねて、このたびようやく第10巻を刊行する運びとなった。まことに喜びにたえない。

学術雑誌は、掲載論文の内容もさることながら、何よりもまず、継続的かつ定期的に刊行されることが大切である。継続性のない刊行物は、雑誌すなわち定期刊行物の名に、値すらしなないといえよう。

今日は、情報化時代といわれているが、医学情報の発信もまた、きわめて活発である。毎日おびただしい数の医学論文が発表されている。それらを掲載する医学雑誌の数も膨大である。加えて、学問の専門分化がますます進行して、医学雑誌も、狭い専門領域だけをカバーするいわゆる専門誌が主流化する傾向にある。当病院のスタッフも、論文の大半はそれぞれの専門誌に投稿しておられるのではあるまいか。

そのような状況のもとで、本誌のようなタイプの雑誌を維持し、発展させていくのは、必ずしも容易ではない。

しかし、とくに臨床医学の論文の中には、いわゆる専門誌ではなく、むしろ本誌のような雑誌に発表したほうが、より適切なものも少なくないと思う。そして、それらの中に、専門誌に掲載された論文とは違った、学術的な価値を持つものが含まれているはずである。専門誌がますます主流化していく時代だけに、かえって本誌のようなタイプの雑誌が貴重なものになっていく、ともいえるのである。

また、本誌は、ご覧いただければおわかりのように、原著論文や症例報告だけで編集されているのではない。当病院のスタッフが1年間に発表した著書・学術論文、学会報告の他、剖検記録、CPC記録など、病院の学術的ならびに医療上の活動がよくわかるように採録されているのである。本誌は、いわばわが病院の学術年報ともいうべき性格をも備えている。

第9巻の巻頭言に的場院長がいみじくも書かれたように、「Klein aber mein」わたしたちの自分たちの雑誌として、本誌を大切に育てなければならないと思う。

当病院のような、高度な先進的医療を担う中核的総合病院では、診療と研究は、つねにパラレルに発展していく。病院が発展するときには、必ず院内の研究活動も高揚する。そして、研究活動の高揚なしには、病院の発展もあり得ないのである。

本誌が、年とともに内容を充実させつつ、長く刊行を続けていくことを、心から望まずにはいられない。